
DIVINE GARDEN

銀猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D I V I N E G A R D E N

【Nコード】

N 5 9 4 2 K

【作者名】

銀猫

【あらすじ】

一国の王子より命を受け、隣国マグナードへと赴いたルミナス教国の聖騎士・カーム。英雄王の死の真相を探るためだったはずの旅は、暗殺者の娘・ルナとの出逢いから、思わぬ方向へと転がっていく。

「人として生を受けたんだ。ならば、神にも挑んでみたいだろう」
——そして、彼らは『神様の敵』となる。

※原案…篠森京夜様

プロローグ 誰にも届かなかった言葉たち（前書き）

こんにちは、銀猫です。初挑戦かもしれない正統派ファンタジーです。篠森様の素晴らしい世界観を最大限に表現できるよう、頑張りたいと思いますので、なまあったかい目で見ていただければ幸いです。

それでは皆様、どうぞお楽しみくださいませ。

プロローグ 誰にも届かなかった言葉たち

「——さーあてさてさて、はじまった。マリオネッタが、はじまった」

白の満ちる空間に、泡のようにぽっかり浮かんだ音が木霊した。

「古いにしえよりもなお昔、神代の頃より綴られし、御伽話が幕開ける」

できそこないの輪唱めいた、弾むような旋律は、やがてひとつの声となる。

「舞台となるは神の庭たる人の国。歌い踊るは死すべき運命さだめの人の子ら。その宿業に従いて、いくさに臨む勇者たち」

すう、と白より音もなく、宙に浮かんだ三日月ひとつ。

にんまり笑んだ唇は、白い歯こぼして高らかに。

「さてもさても勇ましき、戦歌を歌いて剣と舞う。紡ぎし言葉は力
在り、祈りは傷つき倒れし者をも癒す」

宙を弾む口ばかりが伝説サーガを唄う。勇壮で荘厳で、寝物語のような英雄譚。

「神の御業は何処いづこに在りや？ 人の奇蹟は何処に在りや？」

ぽっかり浮かんだ三日月の、またその上に三日月ふたつ。笑みを
象る双眸は、白い貌を彩った。

徐々カタチに容を現せる、細い頸と細い四肢。白い霞が周囲に凝り、ひ
とつの姿をあらわした。

模した姿はおんなのこ。月の光の降る夜に、雪原に落ちる影にも
似た、銀髪揺らして少女はうたう。

「神の御業は天上に。人の奇蹟は地の上に」

白の満ちる空間で、くるりくるり楽しげに、ステップ踏んで少女
は踊る。

「―――神へと挑む人の子らに、どうか幸あれ、光あれ」

*

蒼い夜闇の部屋を、月灯りばかりが照らしていた。

スポットライトに照らされた舞台であるかのようなその場所に佇む男は、月光のせいばかりでなく白い顔をしている。

それもそのはず。男の腹には深々とナイフが突き刺さっており、彼の身体を流れていた生命が、ぼたぼたと下半身を濡らしていた。

「儂を弑するか」

低く、男が呟いた。

深みのある声は重厚でいながらよく透り、語ることに慣れた者のそれである。

「神となるつもりか。あの程度で全てを知った気か」

暗殺者は、答えない。

く、と男の喉が鳴った。

それは、死への恐怖ではない。

腹を刺された痛苦ではなかった。殺される理不尽への悔しみではなかった。

男の身体が震える。そしてそれは大きな揺れに変わり――

彼は、天を仰いで哄笑した。

[illegible]

死を目前にして自棄になった訳でも、気が触れた訳でもない。

男は、ただ純粹に、どこまでも純粹に、圧倒的な愉悦でもって――笑っていた。

「ははははははは！ 成程成程！ これは———こんなに面白いことはない！ 『神殺し』が神となるか！ いや、木乃伊ミイラになるか、

木乃伊獲り！ははは、ははははははははは！」
そして男は大きく両手を広げた。役者のように大仰な、しかし支配者の威厳に満ちた動きだった。

「それならば思うまま行動するがいい！ そして知れ！ 人は時に神をすら超える生物であるということを！！」

さながら年老いた雄獅子の咆哮のごとく。

虫の息でありながら、それでも弑逆者へと寧猛に歯を剥き出す。それは肉食獣の笑みにとてもよく似ていた。

「伝えよ。———死など、ただ、これだけのことだ」

男は、不敵ににやりと笑い———

そのまま、どうとその場にくずおれた。

———大陸最強国家を統べる、『霸王ハイレオンを超える者』王の崩御である。

第一話 綴られていく物語

「うわあ、すごいねえ!」

虎目石の大きな瞳をキラキラと輝かせ、ニートは歓声^{こがね}をあげた。茶に近い金の髪が陽光を浴びて、その表情に負けぬ黄金^{こがね}に輝く。

色鮮やかな露天のテントが立ち並ぶバザールには、物売りの威勢のいい掛け声が飛び交っていた。荷車が石畳を行く音、人々のざわめきが活気にあふれた大路を彩り、まるで祭りのような賑やかしさである。

カームはそんな喧騒を心地よく受け止めながら、きよろきよろと視線をめぐらせる少女の様子に苦笑した。楽しそうなこと、面白そうなものを探すのに一生懸命な彼女は、本来カームとはひとつしか年齢が違わないのに、彼よりもだいたい子どもじみて見える。

カームは晴れた日の水溜りの瞳を細め、幼子に諭す口調でニートを嗜める。

「ほら、あんまりはしゃぐな、ニート。一応仕事だ」

「う、そんなのわかってますーっだ。……あ、見て見て、あれ何だろう?」

「わかってないだろお前」

云った側からどこかへ駆け出そうとした幼馴染を、首根っこを引っ掴んで引き戻す。レディに対してあるまじき、というか、猫の子でも扱うかのような暴挙に、ニートは「何するの」と抗議したが、カームは「やかましい」の一言で切り捨てた。

そんなコミカルなやりとりに、ふたりの一歩後ろを歩いていたユリウスは思わず噴出す。

「何だよ」

「何よ」

笑われた当の本人たちはむっとしてユリウスを睨みつけたが、そ

れがあまりにも息ぴったりだったので、彼はいつそう紫がかった暗紅色の髪を揺らし笑い転げた。

さらりと流れる髪から覗く耳は、優美に長い。

風の民との混血である少年は、くつくつと喉を鳴らしながら思慮深さにひかる苔緑色モスクグリーンの瞳を彼らに向ける。

「いや……さ。ふたりとも、十分はしゃいでるように見えるよ?」

彼の上官である灰色髪の少年は、公務中は役職に相応しい落ち着いたきをもつて振る舞っているが、幼馴染の少女とコンビを組むと途端に子ども返りする。

笑い含みの指摘に聞き捨てならぬと噛み付いたのは当のカームである。

「ちょっと待て、はしゃいでるのはニートだろ、俺はこいつを止めてるだけで」

「いつもよりその制止が面白いのは気のせいかな?」

「気のせいだ!」

怒鳴りつけてそっぽを向く彼の耳が、少しばかり赤くなっているのに気づいてまた笑う。

一方のニートはおのれの振る舞いも少年の羞恥も気にせずに、あー! と明るい声をあげた。

「ねえねえカーム、あそこでフルーツジュースを売ってるよ! その場で搾ってくれるんだって!」

つい今さっき釘を刺されたばかりだというにも関わらず、立ち並ぶ店のひとつを指して楽しげに声を弾ませるニートに、カームは溜め息を吐く。

「だからな、あんまりはしゃぐなって——」

「天気が良いから喉が渇くの! ちゃんとふたりの分も買ってくるから! あ、経費でよろしくね!」

「おりるか、こんなんです!」

「じゃあカームのおごりー!」

「ふざけんな——!」

怒髪天を衝くカームの叫びなど軽く聞き流し、ニートは赤いパラスルが可愛い露店へ突進していった。カームはその後姿になんか色々と言いたかったが言葉にならず、がっくりと諦めたように肩を落とす。

「……俺、人選、間違えたかもしれん」

「もしかしてね」

ひとりごちた呟きをさりと肯定してくれた副官に恨みがましい眼を向けるが、彼はそれに気づかぬ振りで笑っている。

ひとしきり笑って、その笑みがふと翳る。

「……でも、信じられないなあ……」

「……俺もだ」

ぽつりと呟いたカームの瞳にも、似たような影が落ちていた。

「……暗殺、なあ……」

頼んだよ、と真剣な瞳をした黒髪の少年が脳裏に揺らめいた。カームらが住みなれた街を離れ、国境近くの街まで旅してきた、そもその理由。

カームの友人であり、仕えるべき主である少年からの要請が始まりだったのだ。

「秘密裏にマグナード王国へ行ってきた欲しいんだ。随行は君が決めてくれて構わない」

『神棲まう国』ルミナスの首都、聖都ミストラス。白亜の王城の一室で、開口一番、シャリオはカームに向けてそう云った。

「マグナードへ？」

カームは少しばかり面食らい、ぱちりと瞳を瞬かせる。

『剣の王国』^{つるぎ}マグナードは、ルミナス教国と隣り合う軍事国家である。

カームの養父が外交官という職に就いていたため、カーム自身も幼い頃から諸外国を行き来しており、特に隣国の王子たちとは仲の

良い友人だった。双子の妹姫とは口約束の婚約者でもある。

「あの国で何かあったのか？」

王族の誰かが病になったとか、それとも内乱の噂でも出たのだろうか。

眉をひそめるカームに、シャリオは灰色の瞳に憂いの色を乗せて頷いた。

「……マグナード国王が、暗殺されたという風聞が届いたんだ」
はなし

予想よりもずっと悪い——いや、予想すらできなかったその話にカームは驚愕した。

「レオン四世陛下が!？」

マグナード王国の国王である——いまや「あった」というほうが正しいのかもしれないが——レオン四世は、地方の小国でしかなかったマグナードを、大陸最強国家へと導いた希代の名君である。平和的に戦乱に終止符を打った英雄として、民からは尊敬と畏怖をこめて、伝説の覇王レオンを越える英雄、ハイレオンと呼ばれている。

———それほどの賢王が。

「……そんな、まさか。あの方が、暗殺されるなんて……」

「うん、私もそれは容易には信じられない。だが、亡くなられたことは、確からしいんだ」

謁見、というほどのものでもないが、カームは何度もハイレオン王と直接言葉を交わしている。幼いカームやニートがマグナードの王子らと遊んでいれば、政務で忙しい中でも必ず顔を出して、小さな頭を撫でてくれた。悪戯が過ぎれば実子と隔てなく拳骨を落としてくれて、そして笑って許してくれた。

その、ハイレオン王が。

ぐ、と唇をかみ締めるカームに、シャリオがだから、と静かに口を開く。

「君にはこの真偽を確かめてきて欲しい。真実レオン四世が暗殺されたのか。また可能ならば、下手人やその背後関係を」

シャリオがカームにこの話を持ってきたのは、カームが異国慣れしているからというだけでも、信頼できる人間であるからというだけでもないのかもしれない。

カームは——ルミナス教国の聖騎士パラディンは、流れるような所作で膝こつへを付き、祖国の第一王子へと頭こつへを垂れた。

「————拝命しました」

シャリオのもとを辞した後は慌しいものだった。

随行員には、副官であり、優秀な魔導師であるユリウスと、部下兼幼馴染の看護兵、ニートを選んだ。共に信頼できる友人であり、何かあっても大概のことには対処できる実力者である。彼らに話を通した翌日には、一行は旅支度を整え、マグナード王国へと向かっていた。

今回はあくまでも密命であるため、彼らは各々の正装ではなく、街道に行く旅人に扮している。

思いのほかニートがはしゃいでいるが、それも物見遊山の旅人らしいといえはいつてしまえば不自然ではない。これならばそう目立つこともなく、マグナードへも潜入できるだろう。

「————だというのに。」

「女の子相手に何するの！？ 格好悪いよ、そういうの！」

昨今珍しいくらいにわかりやすいゴロツキを向こうにして高らかに声を張り上げているのは、まぎれもなくおのれの同行者である少女だった。

「————な・に・を・やっているんだあいつは！！」

カームの言葉にならない怒りを感じ取ったか、ユリウスが苦笑混じりに解説をしてくれる。

「……いや、立派な行いだと思うよ？ 絡まれてる女の子を助けに複数人の男に食って掛かるなんて、誰にでもできることじゃない」

「……ああ立派だ、俺もこれが聖都だったら褒めてやった。だけど

な、今の俺たちの立場をわかっているのかアイツは!？」

「わかつてはいるだろうけど……多分、あれ見たとたん、抜け落ちたね。あの分じゃ」

「ああもう……ッ!!」

カームは頭をばりばり掻き回して、いまや騒動の中心となっている妹分のもとへと心底嫌そうに寄っていった。ユリウスも肩をすくめそれに続く。

「はいはいはい、そこまで!」

睨み合う両者の間になんとか身を割り込ませ、少年たちは少女と男たちを分離する。何か云いたそうにしているニートと絡まれている少女の相手はユリウスに任せ、カームはガンたれる男たちが口を開く前に、先手必勝とばかりにまくし立てた。

「俺の連れが失礼なことを云っていたらすまなかった。謝罪する。

こいつはあとでしっかり絞っておくから、ここらへんにしといてくれ。そんじゃ、これ以上アンタら刺激しないうちに、俺たちは退散するから」

そしてユリウスを目線で促しその場を離れようとするが、もちろんゴロツキどもが許してくれるはずがない。

「ッああ!？　ッだテメエはよお!？」

「正義の味方気取りか、兄ィちゃん？　カッコイイー!」

「はいそうですかーって帰すと思ってんのかゴラァ!？」

ああもうやっぱりな。

巻き舌バリバリのあからさまなヤンキー口調に辟易した色を隠しもせず、カームはうんざりした顔でちらりと男たちを一瞥する。

「……俺が引いてやってるうちに素直に帰っとけ。あまり度が過ぎるようであるなら……少し、痛い目に遭ってもらうぞ?」

「痛い目え!？　なんだってんだよォ!」

「面白えじゃねえの、どうするってんだ坊や?」

「痛い目に遭うってエのは、テメエのことかい!？」

「ひゃひゃひゃひゃひゃ!　そのとおりだ!」

ゴロツキどもは聞くものを不快にさせるような、下卑た笑い声をあげた。

「――ま、ここで素直に忠告を聞き入れられる程の頭があるなら、チンピラなんてやってないか。」

内心溜め息を吐いて、カームはやれやれとばかりに軽く肩をすくめる。

そして、ゆっくりと右手を動かし――勢いよく、長剣を振り下ろした。

「……な……ッ、な、ななアッ!？」

奇声を上げて、刃を向けられた男が後ずさって尻餅をつくように座り込んだ。彼の鼻の頭に、小さく血の玉が浮かぶ。

仲間を傷つけられた男たちはしかし、怒りの声を上げることでもできずに立ち竦んだ。――この少年は今、何をした？

否、何をしたかはわかってるのだ。剣を抜き、振り下ろし、仲間の鼻先を掠め静止した。だが、その過程がまったく見えなかったのだ。

ぱくぱくと酸欠の魚のように口ばかりを動かす男に、ひたりと剣の切っ先を突きつける少年の瞳はあくまで平静で、怒りや高揚などといった感情は欠片も見られない。強いて云うならば――彼は、とても面倒臭そうだった。

「もう一度だけ云うぞ。そこらへんにしとけ。これ以上絡むってんなら、少し、痛い目に遭ってもらう」

そして少し考え、言葉を足す。

「具体的に云うと、三日はベッドから起き上がれないくらい」

いやにリアルな日数を出されて、ゴロツキ共は淡々とした少年の本気を感じ取る。ぐうう、と冷や汗と共にうめき声を漏らし、舌打ちしながら野次馬を掻き分けて立ち去った。腰を抜かした男が慌ててそれを追いかける。

「ベーツだ。一昨日いらっしやい」

その滑稽とも云える背中に舌を突き出すニートの頭が、がしりと

掴まれた。

「ニ・イ・トー……」

地を這うような声にたらりと冷や汗を流し、ニートは作り笑顔でゆっくりと振り向く。そこには同じく作り笑顔の、しかし色々なところが隠しきれずに引きつっているカームの顔。

「……っの、馬鹿娘!!」

至近距離で思い切り怒鳴られ、ニートは反射的に首をすくめた。

「目立つような真似はするなって云っただろ！　なんでわざわざ自分から騒ぎに飛び込んで行くんた、お前は！」

幼馴染のその迫力にニートはうっと一瞬怯むが、負けじとばかりに云い返す。

「だってえ！　ほっとくなんてできないでしょ、カームこそそれでも騎士なの！？　弱気を助け強きを挫くのが騎士なんじゃないの！？」

「だからこそだ！　宮仕えにはおのれの職務が第一なんだよ！」

「こんの冷血人間ー！」

「……ふたりとも……。目立ってるよ……」

そして声が大きいよ。

とほほと肩を落として控えめに突っ込むユリウスと、そんなもん耳にも入らずに云い合うカームとニートは、今的一幕のこともあり、とてもとても人目を引いていた。

「……あの、」

そんな雑踏に劣らず賑やかなしい一同に、鈴のように軽やかな声がかけられる。

その声音の美しさに思わず顔をそちらに向けると、三人は揃って大きく眼を見張った。

綺麗な少女だった。

軽く波打つ長い髪は処女雪の純白で、膚は白を通り越して透き通るような色をしている。レースのような睫毛に縁取られた瞳は銀の散った夜群青^{ダークブルー}。その星空の輝きからは、彼女のやさしさと聡明さが

見てとれた。

小作りの顔には形のいい目鼻が品良く並べられ、ローブの下からちらりと見える四肢は華奢で、触れれば壊れてしまいそうな陶器の人形を思わせる。まだ十代も半ばに差し掛かるかどうかという年頃に見えたが、その美しさは完成されていた。

少女は見惚れる三人に向かってにこりと笑んだ。春先に蕾がほころぶような笑みだった。

「ありがとうございます。助かりましたわ」

その言葉に、もともとゴロツキたちに絡まれていたのは彼女なのだ、カームはようやく理解する。そして、これならばナンパもしたくなるよなあと、追い払った連中の心情をしみじみ思った。やり方を間違っていたのは事実なので、同情などする気はないが。

「どういたしまして！」

ニートが満面の笑みを返す。カームを押しつけて少女の前に立ち、彼女の両手をとった。

「大丈夫だった？ 怖かったね、ごめんね、カームが来るの遅くて」

「俺のせいかな」

「いいえ、とんでもないです。助かりました。本当にありがとうございます」

「無視か……」

女同士だからか、それとも性格ゆえか、初対面であるのに既知のようににこにここと笑いあうふたりの少女に、カームは首を落として一歩下がった。そんな彼の肩を、ユリウスがぽんぽんと叩く。

「『男にとって、女は山の天気であり、嵐の夜の海であり、未開の地そのものである。捉え難く、翻弄されるばかりで、何ひとつとして正確なことはわからない』————養父ちちの言葉だよ」

「流石クレメンテ様……いいこと云うな」

子猫のように気まぐれな少女を相手取るにはまだ圧倒的に経験が足りない少年ふたりは、楽しげに会話を交わす少女たちに口を挟む

こともできないまま、ただその場に突っ立っているだけだった。

「アナタ、ひとり？ 駄目よ、アナタみたいな可愛い子がひとりで歩いてたら、さっきみたいに絡まれちゃうわよ？」

「いえ、連れがいるのですが……生憎、この人波ではぐれてしまっ
て」

「あらら、それは大変」

云いながらカームを見るニートに、彼は諦めたように手のひらを見せた。好きにしろ。ニートは幼馴染の意思を完璧に汲み取り、にかりと笑った。

「じゃあ、一緒にバザール回ろうよ！ その人も、きっとアナタのこと探していると思うし、すぐ見つかるわ！」

「え？ でも、ご迷惑では……」

「全っ然！」

ためらいなく云い切ったニートに笑みをこぼし、少女はでは、と頭を下げる。

「申し訳ありませんが、お言葉に甘えてしまってもよろしいでしょうか？」

もちろん——と、ニートが答えようとしたとき、鋭い声が飛んだ。

「御嬢様！」

緑がかった黒髪をなびかせて、少女に駆け寄ってきたのは、カームらよりも五つほど年上と思しき女性だった。

「ミラ！」

女性を見て、少女はぱっと顔を輝かせる。その少女の頬を両手で包んで、女はほうと安堵の息を吐いた。

「よかった、ご無事で……」

女の両手にみずからのそれを重ね、少女が微笑む。

「平気ですよ。貴方の方こそ、大丈夫でしたか？」

「私など。それよりも申し訳ありません、このような場所で御嬢様から離れてしまうなど……」

「この人です、仕方がありませんよ」

少女は恐縮仕切りの女を慰めるようにやわらかく瞳を細めた。

「それに貴方だけが悪いのではありません。私もつい余所見をしてしまつて、貴女を見失つてしまいました。ごめんなさい」

「いいえ！ 私が注意していれば……御嬢様、先程このあたりで人だかりができていたようですが、何もありませんでしたか？」

「ええ、大丈夫です。こちらの方々に助けていただきました」

「まあ……」

少女の言葉に、女は小さく呟いてカームらの顔をしげしげと見つめ、ふわりと表情を和らげた。

「ありがとうございます。私の不注意で御嬢様から離れてしまい、その間にもしも何かあれば、私は『光の神』^{ルミナス}に顔向けができませんでした。心より御礼申し上げます」

「いえ、そんな！」

深々と頭を下げられ、ニートは慌てて手を振った。

「あの、顔を上げてください！ 何にも、大したことしてないんです！ カームもユリウスも来るのが遅いし！」

丁重に礼を云われ面食らったか、女に氣を使っているのか仲間を貶しているのかわからないことを口走る。散々言葉を尽くした後（主にニートが）ようやく顔を上げた女は、よろしければお礼にお茶でもと、パラソルの下にテーブルと椅子を置いたオープンカフェ風の露店へ一行を誘った。

そういえばニートが飲み物を買に行ったのがそもそもだったのだと思い出し、カームは喜び勇んで頷く少女を止めることはせずに成り行きに従う。うまい具合に丁度席が空いたのでそこに掛け、めいめい飲み物と軽食等を注文する。

店員が去っていき、なんとなしに沈黙が訪れたが、少女の声がすぐにそれを払拭した。

「貴方がたは旅人さんなのですか？」

にこにこ訊ねる少女に、カームはニートが下手なことを口走る

前にと、当たり障りのない返事をする。

「ああ、聖都から来たんだ。アンタらは？」

「まあ、偶然ですね。私たちもミストラスから来たんです」

「わあ、そうなの？ どこへ行くの？」

「ええ、セアレスへ」

「『国境都市』へ？」

ユリウスが意外そうに目を見張った。マグナードとの国境の街であるセアレスへは、ここからまだ大分遠い。

「おふたりだけで、ですか？」

だから彼が思わずそう訊ねてしまったのも無理はない。近年、目立った戦乱などは起こっていないが、女二人で旅ができるほど治安が良い訳でもない。

「ふたりだけですけれど……」

少女はちらと隣に座る女を見て、ユリウスに視線を戻すと明るく笑った。宝物を自慢する子どものような笑顔だった。

「ミラはすごく強いんです。とっても頼りになるんですよ。大抵のことだったら、彼女が何とかしてくれますから、私は安心なんです」

「御嬢様……」

困ったように眉をひそめた女の頬が微かに赤い。なんのてらいもなく褒めちぎられて、面映いのだろう。ニートは仲の良い姉妹にも見えるふたりにふふ、と頬を緩めて、ふいにぱんと手を打った。ねえ、よかったら、なんだけど。

「私たち、マグナードまで行くところなの。方向が同じだったら、一緒に行かない？ やっぱり女性の二人旅って、さっきみたいなのともあって、物騒だし」

楽しそうに思いつきという名の提案をするニートに、カームは慌ててストップを掛ける。

「おい、ニート！」

ヘッドロックをかましてそのままずりずりと椅子ごと後ずさり、距離をとる。

「お前、自分の立場忘れたか!? 何を云ってるんだよ!」

小声で怒鳴るなんて器用なことをしてのける幼馴染に、ニートはぷうと頬を膨らませた。

「忘れてないわよ、お仕事で、密命でしょ? 大丈夫よ、国境まで一緒に行くだけなんだから、問題なんてないじゃない」

「わかってるっていうんなら、頼むから密命って大声で云わないでくれ……」

ごそごと云い合っているその会話は、参加していない残りの三人にも丸聞こえで、ユリウスは思わず天を仰ぐ。少女と女は聞こえない振りで、慎ましく沈黙を守ってくれた。

オーダーが届くくらいの時間を掛けた、一緒に行く・行かないの攻防戦は、ニートの勝利に終わったらしい。嬉々として少女たちを誘う彼女に、カームはもう何度目になるかわからない溜め息を吐いた。

「……ま、女連れならカムフラージュにはもってこいか」

「また君はそういう……」

「……ん?」

開き直りのつもりか、まったく可愛げのないことを呟くカームにユリウスは溜め息を漏らし、ニートはどこかひっかかりを覚えて首を捻る。

彼女が解答に辿り着く前にと、カームは少女らに声を掛ける。

「こいつが勝手に話を進めて悪い。でも、アンタらがよければセアレスまで一緒に行かないか? 多分そのほうが安全だと思うぜ、お互いに。人数は多いに越したことはないからな」

「そうよ! 私、女の子がいてくれると嬉しいな!」

何の含みもない笑顔につられて、少女も困惑気味だった表情をやわらげる。

「ええ。それでは、ご迷惑でさえなければ、ご一緒してもいいですか? ……いいですよね、ミラ?」

「はい、御嬢様」

「決まりね！」

ニートは嬉しそうに云って、少女に手を差し出して笑う。

「私はニート。こっちがカームで、こっちがユリウス。アナタたちの名前を聞いてもいい？」

「あら。私ったら、名乗りもせずに……」

口元に手をやって、次いではにかむように少女は笑った。年相応の、明るく幼い笑顔だった。

「失礼致しました。ええと、彼女はミラ。私の友人、兼保護者です。私はフィアナ。よろしく御願致しますね」

第二話 薄蒼い夕闇の街にて

道中は和やかなものだった。

フィアナは年齢の割りに大人びており、また博識だった。ニートとは姉妹のように仲良く笑いあっていたが、フィアナのほうが姉に見えてしまうこともしばしばあり、カームとユリウスの失笑を買っていた。

ミラは武器の扱いに馴れていて、ウサギや鳥などを弓で射っては簡素なものになりがちな旅の食事を豪勢なものにしてくれた。宿屋に入るよりも野宿の時のほうが食事がいいと、元宮廷魔導師の養子であるユリウスをしていわしめさせた程だった。

次の街へ到着したのは、太陽が傾き始めた夕刻だった。

ここ二、三日野宿ばかりだった一同は早速街の人間に宿屋の場所を聞き出し、そこへ向かう。

紹介された宿は中の上といったところで、そう大きくもない寝台が窓際の壁に、その枕元にタオルとバスローブの積まれたチェスト、そして部屋の中央には小さいながらもテーブルと椅子が鎮座していた。テーブルの上には水滴のついた水差しとコップ、ティーポットとカップも伏せてあった。茶葉と湯は階下^{した}の食堂でもらえばいい。

あの値段でこの部屋は上等、と満足して、カームはベッド上に旅装を放り投げた。

しかし一息吐く間もなく元気なノックが響き、ニートが顔を出す。カームは苦い顔をして幼馴染を迎え入れた。

「……お前さ。返事する前にドア開けたら、ノックの意味ないって思わないか？」

「カームだもん、もしも着替え中に開けちゃったって大した問題ないでしょ」

あっさり云つてのけた少女はますます仏頂面になる少年に軽く笑つて、ひらひらと右手を振って部屋を出る。

「夕飯行こうって呼びにきたのよ。ここの食堂、お客さんが多くつてとても座れそうにないから、他のお店に行くんだって。すぐに来てよね、カーム」

「おー」

了解、と右手を上げて、カームは荷物も解かずに貴重品だけ持つと、しっかり部屋に施錠してニートの後を追った。

夜までまだ少しの間がある通りは、賑やかだった。

「ねえ、どんなお店なの？　おいしい？」

顔を輝かせて訊ねるニートに、ミラが微笑ましいものを見るような笑みを向ける。

「ええ、このあたりの郷土料理なのですが、リブをオーブンで焼いて色々な種類のソースを掛けて食べるんです。豪快で美味しいですよ」

「へえ、アンタ前にも来たことが？」

やけに詳しいミラの話に突っ込むと、彼女ではなくフィアナが楽しそうに答えた。

「はい、もう何年も前ですが。デザートのア이스クリームも美味しいんですよ」

「うわあ、楽しみ！」

両手を挙げてくるりとその場で一回転する少女をかわして、カームは落ち着くと呆れて云った。

「人にぶつかるぞ、あんまりはしゃぐなって、っ！」

云い終わる前にバランスを崩した少女の肘がカームにぶつかり、それに彼がよろめいたとき、どん、と背中に強い衝撃を感じた。振り向くと通りすがりの人間にぶつかってしまったらしく、果物の乗った浅い籐の籠がもろともに地面に落ちてゆくとところが視界に入った。

「あ、すまない！」

カームは慌ててしゃがみ込み、籠を拾い上げた。あちこちに転がった果実を拾って、一緒に手渡す。

「……………」

無言で籠を受け取ったのは、娘であった。年の頃はカームよりもやや上くらいだろうか。

濃い色の膚は熟したオリーブのような色と光沢を持っていて、すらりとしたやかな肢体は女性らしいまるみを帯びている。やや太めの眉にはつきりした目鼻立ち、黒褐色の艶やかな髪の毛の、どこか異国的な娘だった。

ふと、娘の身体に目を落としたカームは、あちやと顔をしかめた。胸から腹にかけてが葡萄色に染まっている。見れば籠の中の葡萄の房が、ものの見事に潰れてしまっていた。

「悪い、潰しちまった……。とりあえず、これ、使ってくれ。で、えーと、葡萄、弁償するよ。これで足りるか……。？」

洗濯屋の代金分も含めた、多少大目の額の硬貨とハンカチを娘に渡す。娘は硬貨の枚数をちらりと見て確かめ、小さく顎を引いた。

「……大丈夫」

道の端まで転がっていったオレンジを追いかけていたニートがそれを籠に入れて、娘に手を合わせる。

「カームが本当にごめん！ 私たち、今夜は『歌う子犬亭』って宿に泊まるから、もし足りなかったらそこに連絡してくれる？」

「お前……」

無言で頷く娘にもう一度詫びて、カームたちは娘と別れた。

元はお前の所為だろうかと少女の後頭部をどつく少年、それを嗜める少年、笑って眺めている少女と女。

賑やかに雑踏に紛れてゆく一行。

その背を見送り、娘は鳶色の瞳からひかりを消して呟く。

「……………みつけた」

第三話 オリーブ色の膚の死女神

夕飯は期待以上のものだった。たらふく肉を詰め込んで満足したカームは、鼻歌交じりに手入れの終わった剣を鞘に収める。

さて、じゃあそろそろ寝るかな、と伸びをしたとき、こんこん、と扉がノックされた。

「どうぞ。開いてるぜ」

ニートかユリウスのどちらかだろうと思い、軽く返事をする。はたして厚い木製の扉から顔を覗かせたのは、ユリウスでもニートでも、ましてやファイアナやミラでもなかった。

「あれ？」

オリーブの膚と、黒褐色の髪。

どこかで見たその娘のことを思い出そうと努力する前に、簡単に記憶と目の前の姿が結びつく。

「もしかして、夕方の？」

彼女は確かに、夕刻街でぶつかった拳句に葡萄を台無しにしてしまった、あの娘だった。

こっくり頷いた娘は、カームにずいと左手を突き出す。

「これ……」

その手にあったのは、あの時娘に渡したハンカチだった。

「これを届けに、わざわざきてくれたのか？」

カームの言葉にこくと娘は頷く。見ればハンカチはきちんと折りたたまれていて皺ひとつない。火熨斗アイロンを当ててきたのか、藍染の木綿布はまだほのかにあたかかった。

「ありがと……でも気にしなくてよかったのに。手間かけさせちゃって、かえって悪かったな」

娘は今度は首を横に振った。そんなことはない、と云ってくれた

のだろうか。

「それに……用事、もうひとつあるから」

「もうひとつ？」

なんだろう、と訊き返せば、彼女は表情を変えことなく、淡々とその「用事」を口にした。

「うん。――死んで頂戴？」

「……は？」

カームが言葉の意味を理解するより早く、娘が懷へ飛び込んでくる。

「うわッ!？」

咄嗟に身体を捻ることができたのは幸運以外の何ものでもない。訓練と称してしょっちゅう奇襲急襲闇討ちを仕掛けてくる騎士団の先輩らに、カームは初めて感謝した。

娘の手にあるのは、諸刃のナイフだった。槍の穂先に似たそれにくるりと回し、彼女は再度肉薄する。

「……ッッ!!」

鋭く銀がひらめき、カームの頬を掠めた。ちりりとした痛みを感じる間もなく、さらに連撃を浴びせてくる。円を描くように切りつけてきたと思えば、途端に鋭い突きを繰り出す。変幻自在なナイフ捌きに、カームは背に冷たいものが流れるのを感じた。

腕を、眼を、胸を、腹を、腿を、薙いで、切って、突いて、刺して。

カームはそれらをすべて紙一重で避けているが、狭い宿屋^{イン}の部屋の中ではかわし続けるにも限界がある。しかももう就寝しようかという頃合だったので、カームは帯剣していない。ベッドの上に置いていた剣を取るには襲撃者に背を見せなければならず、そんな隙を見せられるほどこの娘は甘くはない。

舌打ちをして、カームは賭けに出た。

このままではどうせいつか逃げ場を失い、殺される。ならば。

後ろ手でテーブル上に置かれていた水差しを探り当て、カームはそれを引っ掴むなり娘へと投げつけた。

「!?!」

ほとんど顔の筋肉を動かすことのなかった娘に、初めて表情らしい表情が浮かんだ。すなわち、驚きと困惑。その変化は微かなもので、すぐに消し去られる程度のもだったが、それは確かに娘の隙となった。

水差し自体は軽く避けたものの、中身までは流石に避けきれず、頭から冷水を被ることとなった娘は一瞬怯んだかのように動きを止めたが、すぐにカームへと銀色の帯を走らせる。彼が寝巻き代わりになっている簡素なシャツの左脇腹が裂かれ、遅れて僅かに血を滲ませた。

ぐっ、と歯を食いしばったカームは、突進してきた娘の勢いを利用し、彼女とおのれの位置を入れ替える。ベッドはすぐそこだが、ちよっと手を伸ばした程度で届く位置に、剣はない。右手をチェストについて娘と向き合ったカームは目を剥いた。

娘が、睫毛の本数を数えられそうなほど近くまで迫ってきている。

「ルミナスの、聖騎士——死んで、ね」

そして、凶悪なまでの刃金の一閃がカームに向かい——

彼の喉を切り裂くことなく、止められた。

「……っ!?!」

今度こそはつきりと表情を驚きと困惑に染めた娘に、カームはにやりと笑ってやる。

「結構、切りにくいだろ? 濡れた布ってよ……!」

洗濯したての綿のタオルは、水差しから零れた水をしっかり吸い込み、ぽたりと雫を落としていた。

両手で広げてナイフの一撃を受け止めたカームは、そのままタオルをぐるりと巻きつけ、絡め取る。娘が反射的にナイフを引くが、その力に逆らわず肉迫し、そのまま床へ押さえ込んだ。ごっ、とい

う音は娘がしたたかに頭を打ち付けた音だろうが、氣遣ってやる理由も、余裕もない。

「……さあ、観念しな。ここまでだ」

娘はあがく様子も見せずに、口の端を歪めて笑うカームを見つめる。

「……任務失敗」

そしてぼつりと呟くや否や、娘は顔の横で縫いとめられていた左手をわずかに動かす。そこには針とも見紛うような、細い細いナイフが逆手に握られていた。

「おいッ!？」

艶消しの黒に塗られたそのナイフは、髪の中に隠していたのだろう。手首を切りつけられて押さえつける力が緩んだ瞬間を逃さず、娘は左腕を大きく振ってカームの腕を払いのけた。凶器を持った腕が一本、完全に自由になる。

そのまま目の辺りを薙ぐように切りつけられて、カームは思わずもう一本の腕からも手を離してしまう。

娘はするとカームの下から抜け出し、一步後ろへ飛び退って膝を着いた。

まだ諦めないのか。ずっと腹の底が冷えたが、娘はナイフをカームには向けず——その切っ先を自分自身に走らせる。

「やめッ——」

咄嗟のことだった。考える間もなく身体は動き、カームの拳が娘の水月を正確に突いた。持ち手の意思を失ったナイフは同時に行き場も失い、からんと乾いた音を立てて床に転がる。つい今さっきまでカームに恐怖を抱かせていた武器とは思えないほど、それはただの金属片だった。

悪い、と心中で謝りつつ、カームは倒れこんでくる娘を受け止め、そのままみずからも重力に従い仰向けに寝転ぶ。どくどくと心臓が血を送り出す音が五月蠅くて堪らない。

「……なん、だっていうんだ、畜生」

カームはこれでも教国の聖騎士である。敬虔な信者とは云い難いが、ほとんど初対面の女に殺されかかるほど品行に問題があるつもりはない。

「……どうすっかな……」

密命を受けている中で襲撃されたのでは、堂々と表沙汰にすることは不可能である。しかし教国に戻るわけにも行かず、さりとて何の詮議もせぬままに殺してしまうことも出来ない。無罪放免など論外である。

騒音を聞きつけたか、ようやくカームの名を呼びながら走ってくる友人たちの声と足音が響いた。

「……………どうすっかなア…………」

とりあえず、一番最初の問題は、ニートになんと云ってこの傷を癒してもらうかだ。

第四話 尋問、のち事情聴取、そして

「さあ、話してもらおうか。――誰に命じられた」

翌朝のことである。

あの後、部屋へ駆けつけたユリウスとニート、フィアナ、ミラは、倒れている娘と傷だらけのカームにぎよつとして、次いで慌ててカームと娘の治療に当たった。驚いたことに、フィアナは治癒魔法に長けており、かすり傷とはいえ身体中に無数にある傷をほんの短時間で癒してみせた。娘のほうも、後頭部に小さなこぶがある以外は問題なく、単に気絶しているだけだと診察に当たったニートは複雑そうな顔で告げた。

とりあえず尋問は彼女の目が覚めてからということで、一応の武装解除を済ませ見張りを置いた。これにはミラが手を上げたが、彼女にはボディチェックだけ頼み、カーム、ユリウス、ニートで交代で番を張った。

そして夜が明けて、意識を取り戻した彼女を取り囲む。

彼らの身分や任務を知らないフィアナとミラには少し席を外してもらっているの、部屋にいるのは娘とカームたちだけだった。

「わからない。男の人」

「男？ 若い男か、それとも年がいったか？」

「おじいちゃん」

「そいつはお前になんて命令したんだ？」

「聖騎士を殺せって」

「ってことは、お前は俺が聖騎士だって知ってたんだな？ 何故？」

「絵」

「絵？」

「絵を幾つか見せられて、同じ顔があったら殺せって」

ああそうか、と合点したように頷いたのはユリウスである。

「……式典の際には聖騎士は全員出席するからね。顔くらい覚えられても不思議じゃないんじゃないかな」

「……だな」

ああもう、厄介なことになった。胸中を隠しもせずに溜め息して、カームは娘へ問いかける。

「で、お前はどこの国の人間で、名前はなんていうんだ？」

娘はその問いにわずかに首を傾げた。淡々と淀みなく答えていた口が閉じる。

「……なまえ……。……国。……わからない」

「……あのな」

カームは娘を睥睨し、声を低めた。

「お前は、人ひとりを殺そうとしたんだぞ。しかもそれは一応、ルミナスの象徴たる聖騎士だ。今黙秘してもどうせ調べられるんだ。尋問が拷問になる前に、素直に吐いたほうが身のためだと思うがな」

恫喝とも取れそうなカームの言葉に怖気づく様子も見せずに、娘はただしばしばと眼を瞬いてカームを見つめる。

「身のため？」

「このまんまだったら、斬首刑ギロチンにもなりかねないってことだ」

それはまったくの脅しでもなかったが、特に何か感じた様子も見せずに娘は了解したとばかりに小さく頷く。

「それなら、命令を果たせる」

「……………は？」

期せずして声が揃う。ハモりにさえならない斉唱をしてしまった彼らは、一様に頭に疑問符を浮かべていた。

ギロチンにかけられることが、命令の遂行になる？

「……もういちど訊くぞ。その誰かは、お前に何て云って命令した？
できるだけ正確に云ってくれ」

カームの戸惑い気味の質問に、娘は淀みない口調ですらすらと命令を復唱する。

「これらの絵に描かれているのはルミナス教国の聖騎士だ。見かけ次第、速やかに殺せ。成功にしろ失敗にしろ、終われば足がつかないよう、即座に自己処分しろ」

「なッ……!?!」

あまりにも酷い命令内容に少年たちが目を剥いても、娘はまったく表情を変えない。

「お前……それで、良いのか？ 聖騎士を殺したら、お前も一緒に死ねって云われたんだろう？ そんな命令を素直に聞いたのか？」

怪訝、を通り越し、信じられないようなものを見る目で訊ねるカームに、娘は訳がわからないといったふういきよんとする。

「……それって、駄目なことなの？」

ことりと小首を傾げる彼女に、一同は絶句した。

無言で顔を見合わせて、彼らは彼女の処遇について談義する。

「カーム……どうするの？」

「彼女、本当に、何にも理解してなさそうだよ？」

「いや、流石に……これは、なあ……」

「……ねえ、見逃してあげるのって出来ない？ だってこんなの、ないよ」

「駄目だよニート、それじゃまた襲ってくるかもしれないし、この分じゃそのまま自殺しかねない」

「何にせよ無罪放免なんて無理だ。国内のことだし、俺が聖騎士だってわかって襲ってきたんだからな」

「でも無事だったんだし」

「……浅くとはいえ、腹割かれたんだけどな、俺」

「治ったから問題ないだろ。法はともかく、情としてはなんか、やりきれないっていうか」

「他人事だと思いやがって……」

「これじゃあ名前も背後もわからないっていうのも嘘じゃなさそう

だね。本当に教えられてないんだろう」

「ねえ、責任無能力者として減刑ってできないかな？」

「本当に他人事だなお前ら。いや、話聞いていると、単に一般常識的なものがないってだけで、思考力も判断力も年相応にはあるみたいだから、無理だろ」

「でも、暗殺はともかく、自殺しろなんて命令に従っちゃうあたりでもうおかしいわよ！」

「多分、人間的に真っ白な状態なんだろうね。生まれた時からそういう価値観を植えつけられて育ったんじゃないかな」

「なにそれ、ひっどい！ もうこんなの、罰する理由ないじゃない！」

「……だが、罪は罪だ。看過はできない」

「このこは悪くないわ！ 悪いのは、命令した奴よ！」

「僕もニートに賛成。彼女はまるで赤ん坊だ。何が善くて何が悪いか、わかっていないんだ」

「つってもな……」

娘は困惑する三人の前に、抵抗らしい抵抗もせずにただじつと彼らを見つめている。その態度は諦観とか覚悟とか、そういうものはなかった。

聖騎士に刃をむけたとあれば、例え未遂であったとしても厳刑は免れないだろう。しかし、この娘はおのれが何をしたのかまったくわかっていない。それどころか、「人を殺し自殺しろ」などという無茶苦茶な命令に、疑問ひとつ抱いていない。

彼女は「捨て駒」どころか、ただの「使い捨ての道具」でしかないのだ。

そして彼女自身、おのれがそういうものであることを信じている。訴えるような二対の眼差しから顔を背け、カームは宣言する。

「俺は、ルミナス教国の聖騎士だ」

よって犯罪者を見逃すことはできない。

きっぱりと云い放たれた、それは正論であったが、年若い正義感

に満ちている少年たちには納得し難いものだった。

石頭、と怒鳴りつけてやろうとしたニートの機先を制して、しかし、とカームは続ける。

「何もわからない、赤子同然の人間に殺しをさせるなんて所業は赦されることじゃない。そしてそのように教えられて育ったならば、ある意味被害者だ。教国は、それを保護するのにやぶさかではない」
ユリウスとニートはカームの言葉を頭の中で反芻し、二秒後、揃って呆れた顔になった。

「……そっか。「情状酌量がありそうなので罰しません」っていうのをカーム語に訳すと、そうなるんだ」

「そういえばカーム、外交官の息子だったわね……」

なんといえばいいのか、素直ではない少年に、ふたりはそろって苦笑をこぼした。そっぽを向いている彼の横顔は憮然としていて、それなりに長い付き合いの彼らには、それはただの照れ隠しなのだと推察できる。

娘はただ、じっと彼らを見つめている。

第五話 月女神（ルナ）

その日の昼過ぎ、一行は街を出た。
カームは振り返り、手を差し出す。

「行こうか、ルナ」

頷いて、雪花石膏の膚の娘は彼の手をとった。相変わらずの無表情だが、心なしか瞳が輝いているように見える。世間知らずの子どもに似たその顔に、カームは笑いをかみ殺す。

名も無い娘は、「月女神^{ルナ}」と名づけられた。

名前すら与えられなかったという事実には、ニートが「名前さえつけてないなんてどうなの!？」と義憤を燃やし、名づけへと相成ったのだが、

「まあ確かに、名前もないんじゃないや不便だな」

「そうですね。何か考えましようか」

「うん。……よし、じゃあ「ルナ」でどうだ？」

「るな？」

「月の女神の名前ですか。いいですね」

「よし。じゃあ決定ね」

「ところで、カーム？」

「うん？」

「それ、もしかしてルミナス教国の略？」

「……。よし、じゃあルナに名前が決まったって教えてやろうぜ
」

「流した!？ え、凶星!？」

などという一幕があったことは、ミラに連れられて湯を使ってい

た本人には教えていない。世の中、知らないほうがいいこともあるのである。

ついでに、水をかぶったまま放置していたので生乾きの上、変装もしていたのだろう、髪や膚がまだらになっている娘を風呂に連行していったミラが彼女を連れて戻ってきた際、「……………誰？」との三重唱が響いたのも余談といえ余談だ。髪と膚の染料を落とし、瞳に乗せた色硝子を外した娘は、まったく印象が違っていた。

フィアナの白さともまた違う、雪を欺く白い膚。月の光に似た髪は、金とも銀とも白ともつかぬ。虹彩と眼球はほぼ同じ純白で、その瞳孔だけがかるうじて青かった。まさしく月光が肉の身を纏って地上に降りてきたかのような娘。

はからずもあまりに似合う名を与えられた娘は、るな、と口の中で何度かその音を転がし、ほんの僅か、瞳を細めた。喜んでいるのだと悟り、一同は顔を見合わせ、笑った。

とりあえず「保護」という名目で旅に同行することになったルナは、辺りを物珍しそうに見回している。微笑ましいその仕草に、フィアナとミラが微笑む。

襲撃者の同行について、彼女たちは何も云うことなくすんなりと了承した。ルナの事情に関しては、告げても問題ない程度のことを話している。あまりに悲惨な話にフィアナは眉を寄せ、ミラは僅かに瞳に剣呑な色を宿した。ルナにも訳隔てなく接する彼女らの笑顔は、優しい。

「じゃ、ちょっと時間とっちゃったから急ごうか。頑張れば日暮れまでに、丘を越えられるよ」

地図と睨めっこしていたユリウスが、太陽の高さを見て云った。はい、と女性陣の声が揃う。

カームも笑って、ルナの頭をぽん、と軽く叩き、地平を見据えた。「よし、じゃあ行くか！」

太陽の落ちる方角を向き、一行は一路、『国境都市』セアレスへ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942k/>

DIVINE GARDEN

2010年10月9日18時55分発行